

企画名： 「福島のお産を考える：産前産後の保養&サポートづくりにむけて福島のお産を考える：産前産後の保養&サポートづくりにむけて」

実施日時： 2012年1月15日（日） 11:50～13:20

実施場所： パシフィコ横浜会議センター 3F 313+314

登壇者：

●話題提供

千葉親子（お産と地域医療を考える会津の会代表）

●ファシリテート

斉藤麻紀子（REBORN&U miのいえ横浜） お産ファシリテーター

●発言した関係者

五十嵐乃里枝（お産と地域医療を考える会津の会事務局長）

湯田秀治（お産と地域医療を考える会津の会）

丸森あや（福島市民測定所 CRMS 理事長）

内田淳子（NPO 法人自然育児友の会代表理事）

参加人数： 約60名

文責： 内田淳子（NPO 法人自然育児友の会代表理事）

1. 千葉親子さんによる話題提供：

地域での産科医療をより良いものにする活動をおこなってきた「お産と地域医療を考える会津の会」だが、3.11をきっかけに、同会の活動のメインテーマは、女性や子どもたちの体をいかに放射能から守り、将来元気な赤ちゃんを産める身体を育んでいくことができるのかにシフトした。

ただでさえ、不安・ストレスが強くなる産褥期の母親にとって、これまでの育児不安に加えて、放射能に対するストレスも加わった。（社）日本助産師会福島県支部が事故後に行った調査によると、この時期の母親たちには、（1）放射能への不安、（2）母乳への不安、（3）外出への不安・ストレス、（4）避難に伴う不安の、大きく分けて次の四つの不安がみられた。

長引く避難生活や放射能汚染の中で、より多くの不安やストレスを抱えることとなった産褥期の母子のサポートが早急に必用とされている。その一方で、震災直後から行われてきた日本助産師会による被災母子支援事業は、今年度3月末で終了する。まだまだこれから支援が必用な時であり来年以降の支援の継続が求められている。

会場からの声：

続く後半では、斉藤麻紀子さんがファシリテーターとして参加し、今、どのような支援が必要なのか。可能なのか。参加者からの発言もまじえ産前産後の母子への支援への道をさぐった。

「赤ちゃんが障害をもって生まれてきたのは、妻が妊娠初期に被爆したからではないか。もっと早くに危険を知っていればと悔やまれる」（郡山市の男性）

「お母さんたちは不安を胸に秘めて口にしない、一人で抱えている」（市民測定所代表 丸森あやさん）

・会津にあるリゾートホテルの社員寮を、子どもたち、妊婦さんたちのための保養・疎開の場に行かないか、検討中という報告。

・静岡から参加された助産師の方からは、妊婦さんのための保養の場づくりをはじめたいと提案があった。

様々な話がでた中、主催者は、あらためて妊娠・出産について、当事者である女性たちの声をより細やかに聞き取る必要を実感した。福島県の女性たちはもちろん、その周辺の地域的女性たちの中にも、妊娠・出産について不安に思う人は増えている。今回、会津で活動する「お産と地域医療を考える会津の会」と東京で活動する子育て支援 NPO が出会って協力する初めての場となった。今後、なるべく早く女性たちへのヒアリング等の実現を図り、その声を自治体に届けつつ、市民としてできるお産のサポートを具体的に考えていきたい。

